

資料紹介

『浄瑠璃歌月丸』

大橋正叔

『浄瑠璃花月丸』については拙稿「竹本一流懐中本について」(大阪大学文学部国文学研究室編『語文』第三十二輯所収)で少しふれた。この度、『花月丸』が独自に所収する段物を翻刻することに所蔵者信多純一先生の御快諾を得たので、『浄瑠璃花月丸』を改めて紹介することにした。前掲拙稿と御併読いただければありがたいと思う。

1 書誌

竹本筑後掾段物集。横小本一冊(縦十・七糎×横十六・二糎)。

題簽 なし(但し、改装表紙に左肩「瑠」のみ判読可の墨書あり)

内題 浄瑠璃歌月丸 竹本筑後掾直伝

丁数 八十三丁。行数 十五行

丁付(板心)

「泪 目一〜二」

刊記  
奥書(裏表紙見返し)  
右此本者依為懇望文句音節等悉校合加秘密令開版者也  
竹本筑後掾

「泪 一〜廿二、又廿二、廿三〜廿六、廿七ノ八、廿九〜三十四」

「遊 七〜二十六」

「略 二〜七、又七〜十、十ノ十二〜二十八」

刊記  
なし

備考

大坂上久宝寺町三丁目

正本屋九左衛門板印

裏表紙に旧蔵者が「愛知県丹羽郡大口村松□」の墨書がある。

2 惣目録 (番号の表記は原本の体裁をかえた)

- (一) 傾城八花形
  - 〓 けいせいはちとく一そん
- (二) 同 三段目
  - 〓 あいやい井戸
  - 〓 いつミ川物ぐるひ
  - 〓 はんごんかう
  - 〓 二段目うれい
- (三) 多田院三段目
  - 〓 らいくわうさいご
  - 〓 ぜんせいいきしやうぞめ
- (四) 男色加茂侍
  - 〓 あさひなが妻きやう女の段
- (五) ゑがらの平太
  - 〓 まつよひ兄弟道行
- (六) 佐々木大鑑
  - 〓 三段目ふし所
- (七) 虎稚物語
  - 〓 ほうしやうがく道行
- (八) 盛久
  - 〓 五段め御そくゑ
- (九) 天智天王
  - 〓 四天王山いり
- (十) 多田院四段目
  - 〓 ぜんじばう方丈記
- (十一) 虎が石四段目
  - 〓 夜討かたミの小袖
- (十二) 曾我五人兄弟
  - 〓 諸天づくし
- (十三) 神道秘密巻
  - 〓 りよしゆくのふうけい
- (十四) 十六夜物語
  - 〓 弁慶くわんじん帳
- (十五) 八島
  - 〓 初はるの御祝義
- (十六) 東山子日遊
  - 〓 忠信大こく舞
- (十七) 廿日正月

(一オ)

- (一) 自然居士
    - 〓 さゝらのまひ
  - (二) 忠度
    - 〓 むかしをしのおすまのうら
  - (三) 佐々木大鏡
    - 〓 ふじとのうらみ
  - (四) 法隆寺開帳
    - 〓 ゑんぞんまくらだんき
  - (五) 輝丸初段
    - 〓 くわけんかう
  - (六) 五人兄弟切
    - 〓 まつよのかど立
  - (七) 八景
    - 〓 さかな上るり本ふし
  - (八) 式三番
    - 〓 色里さかな上るり
  - (九) 形見送り
    - 〓 あらしさいごやつし
  - (十) 甲賀三郎
    - 〓 天づくしやつし
  - (十一) 根元曾我
    - 〓 男ぞろへやつし
  - (十二) 今様 柏木
    - 〓 月見やつし
  - (十三) 盛久
    - 〓 ちごくのゑときやつし
  - (十四) 十二段
    - 〓 四きのやつし
  - (十五) 心中道行
    - 〓 呂州名よせ
  - (十六) 自然居士
    - 〓 道行やつし
  - (十七) 百日曾我
    - 〓 けいせい請状やつし
  - (十八) 大曾我
    - 〓 三日きやうやつし
- 右之内十一ばんハやつしさかな上るり  
 なりかたり様本間の道行けいごとの  
 ふし付にかハる事なし  
 竹本一流懐中本出来ノ分  
 一浄るり見取丸 一浄るり小菊丸

(二オ)

- 一 竹本秘伝丸 一 浄るり連理丸  
 一 浄るり酒毒丸<sup>注1</sup> 一 竹本二朱一部  
 一 竹本宝来山 一 浄るり大かぐみ  
 一 竹本宝鑑 一 浄るり花月丸

(二ウ)

## 3 刊行時期

目録は一冊の書として体裁を保つが三種の書が合綴された寄本である。目録(一)から(三)までは板心に「泪」とあり(以下Aと略称)、(四)から(七)までは「遊」とあり内題「御酒中浄瑠璃」竹本筑後掾正本」と奥書「竹本一流酒中浄るり外より出シ候とハ番組廿番多く殊にいづくしまの八景ハ前後を書そへ板行仕ひろめ申候 懐中本根元上久宝寺町三丁目 正本屋丸左衛門板」とを有する(以下Bと略称)。(八)から(十)までは板心「略」とあり内題はないが奥書「此外あとよりめづらしき替やつし上るり板行仕候 竹本略浄るり 終」をもつ(以下Cと略称)。

つまり、A花月丸(仮称)、B御酒中浄瑠璃、C略浄瑠璃の三種が「浄瑠璃歌月丸」として一書を成していることになる。そして、Bが既に相当する題を有するのをみれば「浄瑠璃歌月丸」が上梓されるに当ってAの部分がその中心でありB・Cが一書としての体裁を保つため付与されたものと推察される。この編刊の時期については連理丸刊行後宝永三年頃と前稿で述べたがA・B・C各部分について検討を加え解題とする。

## A について

所収の義太夫節は旧作が多く、上演年時の新しい作品は(一)「傾城

八花形」と(四)「男色加茂侍」の二作である。共に錦文流の作で「八花形」は元禄十六年十月上の亥日上演<sup>注2</sup>、「加茂侍」は宝永元年上演<sup>注2</sup>と推定されている。「傾城八花形」に対して宇治加賀掾正本「難波染八花形」が改作上演としてあるが、「難波染八花形」にない「けいせい八とく一そん」がAの第一番目、即ち「浄瑠璃花月丸」の第一番に所収されているのは、義太夫の段物集を強調する意味であろうか。通例段物集の最初に載せられた曲が最新曲であることからすれば「男色加茂侍」が第一番目にくるべきであるが、右の事情を考慮し加賀掾の「八花形」上演(宝永元年三月)以後、「加茂侍」上演後ほどない刊行ともみれる。

## B について

原本未見ながら「竹本極秘伝」に合綴された一本があるを知るが刊年は「花月丸」より後になる。所収曲は貞享から元禄十二年頃迄が多く、内題の下に竹本筑後掾とあるのによつて筑後掾受領(元禄十四年五月)後に刊行されたとするのが妥当であろう。ただ、注目すべき曲に(四)八景がある。前述のようにB奥書にことさら断り書を入れてるのは対照すべき「いづくしまの八景」があったことを思わせる。「いづくしまの八景」については前稿で述べたので改めていわないが、ここで思い当るのは「浄瑠璃当流小百番」(山本九右衛門板)に載せられた「酒中浄瑠璃之事」の中の「いづくしまの八景」である。「小百番」の「酒中浄瑠璃之事」に入る「いづくしまの八景」に比べB「御酒中浄瑠璃」に入れられた「いづくしまの八景」はまさに「前後を書きそへ」たものとなっている。さらに、「小百

番」の「酒中浄瑠璃之事」に所収される「神道ひみつの巻・いざよひ物がたり出女・ねの日の遊・くはんじんちゃう」の四曲も「御酒中浄瑠璃」に所収されており、それらについての所収部分は同じである。「いつくしまの八景」がBの奥書で強調された対象に題名の類似からも「小百番」に所収された「酒中浄瑠璃之事」があるとすれば、Bの「御酒中浄瑠璃」も「小百番」刊行後ほどなく刊行されていないとはならなくなる。懐中本にみられた西沢の山本への追隨がここにもみられる。「小百番」の刊行を元禄十五年初春頃とみているので、Bについても単独の刊行はほぼその頃となる。

### Cについて

同版のものが管見の範囲では二本ある。一は大阪大学文学部国文学研究室蔵『色里迦陵頻』に合綴された目録(圖)から圖の部分であり、他の一本は早稲田大学演劇博物館蔵の「やつし浄瑠璃」と題された抜き本の一本である。なお原本は閲覧不能ながら「花月丸」の後に刊行された「竹本極秘伝」にも合本注3されている。

演博本は後人の手で改装された二十一丁(圖心中道行)以下を欠く零本であり、抜き本でないとするれば「浄瑠璃連理丸」惣目録のあとに広告にみえる「略上るり」がこれに該当する。しかし、同館には同じ改装になったと思われる抜き本「音曲色酒盛」が蔵されており、同書が「色里迦陵頻」の一部であることを考えれば、「やつし浄瑠璃」と共に「迦陵頻」からの抜き本でなかったかと思われる。「迦陵頻」は四種からなる寄せ本で、編刊は「花月丸」と同じ正本屋九左衛門(西沢一風)であり「花月丸」と同体裁の横小本で

ある。「迦陵頻」は元禄十六年以前成立とされるが、Cの部分注4について独自の検討をしておく必要がある。Cの中で成立時期を示唆する曲は(同)「形見送り」である。「曾我五人兄弟」のやつしで二世嵐三右衛門の死去(元禄十四年十一月七日)にともない追善をこめ「嵐形見送り」としてやつされ作詞されたものであろうが、この詞章は「金屋金五郎浮名額」(元禄十六年秋上演)に流用されており流行した曲であったことを物語っている。金屋金五郎の死去は嵐三右衛門に先立つ元禄十三年十一月二十日(一説元禄十四年十一月二十日)であるが、「かなや金五郎歌祭文」にもこの詞章は使われておらず、又、「曾我五人兄弟」の本文より「嵐形見送り」の文章に「浮名額」の文章は近いので、金五郎臨終の場に流行のやつし浄瑠璃「嵐形見送り」が当て込みとして利用されたのであろう。なお、「迦陵頻」には金屋金五郎の歌祭文と共に雁金文七の歌祭文が所収されているので、文七が処刑された元禄十五年八月十日以後の刊行が考えられるが、Cの部分については「百日曾我」の「傾城請状」のやつしなどを考えれば元禄十五年頃の成立かと思われる。

以上ABC三種の成立時期について述べてきたが、西沢版による懐中本については前稿で既に指摘したような問題があり、「花月丸」の刊行に際しても他の懐中本との関連を考えなければならぬことになる。A・B・Cの単独の刊行を考えない今、合本の「花月丸」の刊行は「連理丸」との関係から宝永三年頃という前稿の結論をでない。ただ、A・B・Cをそれぞれ検討することにより「花月丸」の上梓がAの部分の刊行することに眼目があったことは、その

成立が最も新しい点、又、他の懐中本に合綴されていない点から指摘できる。よって、紙数の都合もあり全文翻刻できないためAの部分<sup>1</sup>を翻刻し浄瑠璃研究の資料とする。この書の紹介をお奨め下さった信多純一先生に深謝申し上げます。

注1 前掲拙稿「竹本一流懐中本について」では「浄るり酒妻丸」としたが読み違えであり、木村三四吾先生の御教示により「酒毒丸」と読みかえた。

注2 長友千代治「錦文流年譜」（『佐賀大学文学論集』五〇七号）

注3 拙稿「竹本一流懐中本について」

注4 野間光辰校注『浮世草子集』（日本古典文学大系）解説

#### 翻 刻

翻刻に際してできるだけ原本に忠実にと計ったが、印刷の都合上、又通読の便宜上左のような処理をなした。

一、漢字は原則として新字体を用い、新字体のないものは旧字体とする。なな、当て字・誤字は原本のままとするが異体字は現行の字体に改める。

二、ふり仮名・清濁・仮名遣いは原本通りとするが、用字は通行の平仮名・片仮名に改める。又、平仮名文脈において送り仮名の用に用いられている「ハ・ミ・ト等」以外の「ハ・ミ・ト等」は「は・み・と等」とする。

三、句読点は原本通りとするが記号は。で統一する。なお、改行はせず丁付はAの実丁をもって示す。

四、虫喰等で難読な箇所は□又はその旨注記し、正本等で推測可能な箇所は□の中に相当の語句を校訂者がいれる。

五、反復記号は二字以上の「く」は原本のままとし、漢字・仮名の一字の反復はすべて「々」「ゝ」「ゝ」に統一し、原本には従わない。

七、各種節付（文字譜）は原本の相当の位置に入れるが、ゴマ点<sup>1</sup>は示さない。

#### 追記

原本は丁付「又廿二」（翻字廿四丁）と「廿三」（翻字廿三丁）とに乱丁があるが、翻字に際しもとに改めておいた。

#### （本文）

傾城<sup>けいせい</sup>八花形<sup>はっけい</sup> はつとく一そん<sup>いちそん</sup>

地中<sup>ちちゆう</sup> むかしくはいもせごとおやはらからのなづくる迄色といふじをしらざれば。人げんのちへづくこと。はたちをこせ共おろかにて。世わたりの道かうのみち。ごせの道なをうとかりき。ほんなふもとぼだいぞと我まなじりにかゝりしより。はじめて此道ひろめつとんちじゆつちのものとなす。しかはあれど此道のくわふぎうなるをしらざれば。家をうしない其身をほろぼしかけおち又は心中の。中立（一オ）となるかなしさに我じひしんの涙をそゞぎ。めいごほうべんの筆をそめ此くわんのをのこしおく。名付てけいせい八花形則八とく一そんの。其品々をわかつ也是を見是をしる時は。まどわすなづまずすいとなる先第一<sup>せんだいいち</sup>は人にもたれざはい品よくきればなれしやんとしそ扱。りんとして。そして心のかどとれてかけずさはらず

うけながす。水のながれのさつはりと詞すゞしきあいさつの。物こ  
 しはでにおのこを。みかゞばくるのはのすいぞかし。第二ばんには  
 酒あいのしやうごはさら也げことも。ざな(一ウ)れせきなれ上  
 手と也。しゆゑんの間をもあはせつゝ。あいのかさゑの又あいのつ  
 ぎめ。かはりにさわりなく。つとさしものつわものゝまじはり。  
 頼は中のさか大将。扱第三は買日の外。かりの枕のさゞめごとしか  
 もせいもんねすがたの。かたにくいつく恋のおもに。又かたかゆる  
 わかれ品。よの色里にない事よ。第四にはしよあきんど人のしんし  
 やう見聞事。是第一のかんよう也。うりがけ又はあづけ銀思ひの外  
 にそんな事。さきの手の見へぬくら事にとんとはまるがうき世  
 川。その(二オ)しり殿ことあらば彼てきの行色宿に。たよりに  
 かこひの女。断を咄心を付てうかゝふべし。其大臣のしこなしに  
 て。あかさくらさの見ゆることあんやにともし火多たるがごとし。  
 是てうほうの軍法商人のかうめい也扱又人の。かほかたち。かゞみ  
 にむかいなすがごとし此つやざとに入そむる。きぬのもやうもふ  
 うぞくもながきへしたぎに思ひつきこしのまはりの物すきも。げび  
 ずくならずすくならず。いきやう有ていたり有当世男とゆび折の。  
 五番とさからぬおもかげと。ほまれをとるもとくぶんの。第六ばん  
 はこれ(二ウ)よりぞ物の哀はしるぞかし。恋と情はじんぎの二  
 つ。身の一けいはふみの道。かなうつくしうかきなして。ことのほ  
 つゝる糸竹や。白菊ちやのゆ香の道万のけいのうたしなむも。くる  
 はがよひのよせい也つゝまる所はとくと。なる。第七ばんは請出し

本さいになをす事。しるふとのしらぬかつて也。善悪のさた七十五  
 日おやはらからのにくみをうけ。一家のらうじんつき合のそしりを  
 うくるやうなれど。年月あまたのきやくにすれむりなくぜつも品を  
 付。わけよくさばく心からしうとめこじうとなつくる事。ないげの  
 (三オ)下人下女迄に詞やさしくたんなふさせ。おつとのともを大  
 せつに世たいのしまつぬけめなく。りんきはせねどおのづからおつ  
 とを出さぬしかけ事。是皆りはつのとくぞかし。第八とははわかき  
 時けいこくに立よる人。おひても世間にまじはりて心ふるびすおも  
 かげもかはらで一生つれなく。是ぞんめいのとくなり扱。一  
 そんはわるじやれやわるがう中間なんどゝてよねを打こみたいこを  
 いじりすこしのことにあげやをかへむやくの女郎をにないつゝひき  
 ふねかぶるにひきづられ本名よばれはちをかく(三ウ)のちにはよ  
 ねもあげやもきらひ。くめんごかしに大かたは。是よりしんだいひ  
 づみつゝついには家を持つすは一そんにあらざるや後代けいせい  
 八花形。是をうつして色人の。手本にせよと一筆を枕にのこさせ給  
 ひけり。

同 三段目 あいやひいど

あいやひ井戸の。水かゞみ。うつればかはる品々の有がうき世のな  
 らひかな。京もいなかも女子どちよれば。さがなき人ごとやそしり  
 中間と。なに立る。となりのや又むかいのが男うはさのかげ口も  
 (四オ)本は思ひのあさからぬなかにむかいのおないきは。つる  
 べ取手のなやかイヤナッふたりのきかしやんせ。マア此女子とい  
 ふものは何がなつたる物ぞいの。朝からばん迄しをたらとならぬせ

たいに身をやつし。けふをけふ共思わねど男がにくうないゆへに。  
 よい<sup>地色</sup>がうへにもどうぞしてとかくこなるのよいやうに。まけもおと  
 りもせぬやうに朝夕たいた其間に。ちよつとまどろむひまもなくせ  
 んだくすゝぎにきをつかし。ぬいたて仕立させればよい事有と<sup>色</sup>  
 かざりて。おとらのかゝ様きか(四ウ)しやんせ。アノナッちのあ  
 くしやうがきのふもマアく有事か。家主殿の竹をつれ高津さんがい  
 つれあるき。長町の七丁目竹が小やどで日をくらし。あまつさへと  
 まつてきてけさあけがたにちやせんがみ。ごつかりとやせての  
 内<sup>地ハル</sup>もどりし其時は手水のゆともろ共に。くらくむねがわきかへ  
 り物いふまいと思へ共。男は七人あてがいじやなま中いらぬこと  
 いて。又たゝかれてはそんなちと思ひあきらめめしたいて。くはせ  
 てねさせてきましたと。おろく涙<sup>色</sup>せきあけてまつげ(五オ)しが  
 らむやさしきよ。おとらがかゝは打うなづき。どつこもどこでござ  
 んすぞ。わたしが所のあてなしが。此中はけしからず内をせはつて  
 せた<sup>地ハル</sup>くと。俄にいぢると思ひしが。よくくきげばごけるひ。  
 いやはやかゝつたことかひの。きのふも日よりがよい程にせんだく  
 してしまおふと。とうからおきてあくたいてふり付てゐる所へ。  
 ナッ月々のあてがひをせつきにきたかどうしたか。彼ごけづらめが  
 きくきつて。こゝらにうばに行人はごんせぬかどつがもなふ。尋  
 きたかと思はんせ。わたしもきやつめ(五ウ)がこちのをば。そび  
 きにきたと小ばらは立。わしもわしとてあいそもなふ。イヤごけく  
 るひする男はあれどうばちに出る人はない。よそをたつにやと云  
 ければ。どうやら手しゆびわるそうにこそくくと帰りしが。色

こそかはれ品こそかはれさりとはしゆらのたねそいの。此<sup>地ハル</sup>おか様の  
 所のはわかるがきどくなお人じやは。つめに何<sup>色ハル</sup>にもきませぬ  
 ハテよいことやとい<sup>フシ</sup>ければ。くは色かゑるてござんす。ナッわし  
 は又おふたりのがうら山しうて成ませぬ。こちのは年申しいやあつ  
 かい。男もつたと云斗(六オ)内のがたらいで外をかせくと云事が  
 もとでなふて成事か。わしらはほんにかみの有あまじやと思ふて  
 ださんせ。ナッそれはさうじやがつめこゝならう人殿は。いつのまに  
 やどがへが有たやらかしやふだが打て有。となりがさびしうござん  
 しよなふ。爰なおか様ながな事まだ様子をばしらずかひの。大きな  
 かりにあい給ひお内義様は新町多。女郎にうられてゆかんして御  
 ていしゆはかたりめを何とぞ尋出さんと。ちいさいむすめを引つれ  
 て行方もなふ成給ふ。きげばいとしやおか様はくるはのつとめが  
 なしい(六ウ)かきがちがふたとい<sup>地中</sup>ますが。哀なことではないか  
 いの。こゝなおか様わけもないそれがあはれなことかひの。わしら  
 も女房がよいならば女郎にうられてどうぞして。きのちがふめにあ  
 いたいとわらひの。めき帰るやど

同統<sup>ていけい</sup>狂女段<sup>きやうにょだん</sup> へけいこそ所  
 恋な。らばよるひる爰に。かよはまじ。ほり江の水にすぬれて。  
 我は色<sup>中</sup>なき身なれ共。もとのすみかの。恋しきに。よなく<sup>地中</sup>ごとにか  
 よひきて有しとほそをおとつれど。つまもわが子もなかりけり。  
 (七オ)あら情な御事と涙に。くれてゐる所へ。まだいわけなき  
 わらべ共そりや<sup>スエテ</sup>女郎のきちがいよ。又こそきたれくるはせて。  
 わるふまいかと手<sup>色</sup>をた<sup>色</sup>き。わしはつとめをいつやめふ共。まゝな

身なれどこなさんに。あをふ斗にうか／＼とつとめまするにどうよ  
 くな。いつもどらんす事じや。やら。こちやしらぬせうし。きちが  
 ひよく。物ぐるのひよと笑けり。狂人なりとてわらふ子の。中にも  
 わが手ににたはなし。やれかた／＼。わらはずとおしゑてくれの  
 かねゆへに。あかねわかれをするそとよ。あはれと思へ人々と。ま  
 た(七ウ)ひれ。ふしてぞなきのたる。折ふし所のみづしをががた  
 をやすめる其隙に。狂女がそばに立よりて。是は見なれぬお山衆じ  
 や。此みいけどをりにては何やたれぞと尋れば。何山衆とはだか事  
 ぞ。われこそあらぬうきな立。なみやの内にかくれもない。いつみ川  
 と云太夫さん。ア、太夫さん。ア、りよくわいながらとよりそへば。  
 彼男おかしがり。なんのそなたが太夫である。いっちのさまのはし  
 でかなござらふ物とせかすれば。いづみけらく／＼笑して。ア、尤々。  
 いか様太夫といふ物をつゐしか見たる事あ(八オ)らじ一ごのはじ  
 めの見おさめに道申してみせふ。見ておきややいのと云ければ。み  
 づしおいよ／＼おかしがり。太夫がぢやうなら道中がいきはずくれ  
 て見事にある。そんならわしは下男からかさをさしかけませふぞ  
 と。竹ののがさをおゝこにかけ。狂女がうしろにさしかければ。さ  
 つてもそなたはさいかく物。ア、くそれよできました。そうじて太  
 夫といふ物は位を取て松一木。野ちに立たるごとくにてどこから見  
 てもかくれがない。恋と情のふたつくしみつがさねのはでいしや  
 う。のけゑり(八ウ)とをき打かけの追風くゆるをカウツかみ。足  
 くり出してわきめをふらず。むかふに人がござらふが仏が立てあさ  
 んしよが。みぢんもよけずふりかけてとてもぬれたる。わが恋の

海。ふかき思ひの有男あま。およく心に誠があらば。そのいわね  
 の我心手をわきてこぼるゝなみにとへ／＼。是が太夫のおもかけ  
 よ。扱引舟は女郎よりすこし風俗品くたり。町のふうしてほじや  
 へ／＼とつかみからげをおびぐしめ。すそ小みぢかにしやん／＼と。  
 多ちご町から九けん多行。あちらをしまゑばこちらからあげやの三  
 がよひ(九オ)にくる。そこをばちよつとまに合せ。よひのくせつ  
 のいゝまはしもん日のやくそくもらいのせりふ。あふきや折やいば  
 らきや三所しまふてやう／＼と。九けんの中の住吉や是をつとめて  
 どうしてと。もだくだ思ふてくる所にじぶんの恋にへたりとあふ。  
 先いそがしいをさしおいてくらくらい所で立ながら。ちよつといゝたい  
 ことをいひ後にたいこを打てから。やいの／＼とはしり行是もしん  
 きなつとめ也。扱是からがやり手のばん。其まへだれも手ぬぐい  
 も。うちほもかぎもきんちやくも。わしにかしてと取あつめ(九ウ)  
 思ひのへまゝに身しまいて何とやり手によりたり。ようにやあふ  
 かの。是は又よね引舟にことかはり。只大舟をこくやうにコレ此や  
 うにゆらり。へ／＼と跡にさがつてあゆむにも。とかくかぶるがしか  
 りたく朝からばん迄食だくみ。ちの道斗をくにもつてどうやらけふ  
 はくもらねど。どうに入たか。八せんか。ひたい口に石うすがふ  
 たつかさねて有やうな。ア、くなたで切やうな。この茶がのみたい  
 事かなと。恋しゆかしはなかりけり。みつしをいよ／＼おかしが  
 り。是々狂女。其ごとく恋しゆかしい斗では(十オ)なをし心がく  
 つするぞ。そこらを拙者がうかせんと。もんさく袖をひるがへしそ  
 も／＼ほり江の町わりは。しこのはこのかほりを。きやらのかにし



かへて。十方色里家立ならべ。にかいさしきで引しやみせんのおとはてんつるく天ぢく様の。ほしのかずおぼやよみつくせ。ほしのかずをはよんたらば。はまのまごをきぬにおれそれをしもふて有ならば。へそがはらけに糸を付て。西の海をばかゑ出せ。とかくかなわぬうきよゑかなはぬ。うき世やつき。只とにかくかなわぬはかあいおつと(十ウ)かあい子が。見まくほしさとあらぬか。あらぬとぼそに立よりて。われよくだけと打たゞきうき身。くいさく袖涙。かゝる所へおやかたは下べら引つれ方々と。尋めぐりてかしこへ来り。是々大夫何事ぞ。さりとははみぐるしい急でくるはへもどるべし。さ程妻子にあいたくば何とぞ尋合せんと。様々すかせばいづみ川。涙をながし手を合せ。あら有がたやたうとやな然ば早々帰るべし去ながら。此ふんでくるはへるんでおもしろからじ。いざナウかたぐおほらへの。まねしてどつといぬまいか。但しはいやかと(十一オ)いちばれば親かたほうどもであつかひ。ハアテ大夫がいふやうに。どうして成共つれてこい。ヤレさかろふな〜と先にすゝめばいづみ川。ふれ〜それよふれ〜と狂人くるゑばふ狂人もとにもくるふて〜かゑりけり

日本西王母 三段目はんごんかう  
 一ウツキン くるけふりは。はんごんかう。あしたには雲となる。ほのほのかげよりニの君。いきたるおもかげ其まゝにたいしん。でんのきうくはちやう。きよくひおしのけ出たるも。かくやらん。くものびんづら。花のかほ。(十一ウ)せきばくたる両がんに。涙をうかへて

みへたるは。りくわし春の雨をおび。たいゑきの。ふよりのくれないびよりの柳たをやかに。只しを〜とたゞすめばとよ舟それとみもわかずナウ我つまかとやらんとするを人々おしとめ。ひらは、きゑん玉ぎよの。あられの玉の手にもとられぬおもかげは。何をうらみにあらはれしそざんげにつみをほろぼし給へうらみも恋も。この雪の。きへてもきへぬ我心かたちは。かりのすがたにて。先天上の五すいより。しゆみの四しうのさまぐに。ほくしう(十二オ)の千年つるにちぬ心ひとつをわすれじの。みぬ世迄との。ちかひのふみ。いかにけふりと情なや。けふりにけふり。立そひてむねのほむらは夜に三度我が思ひは日に三度。涙くらべんあさち原草の袂も我袖も。露ふれそめて立よればうらみてかゝるうすけぶりおつとのよればなひきのき。又立のけばもとのごとしよるかた波にとよ舟もわつと涙にふししづみ。ふせやにおふるはゞきとの有とみせなばとまれかしとこゑをあげてぞ。なきあたる人々御らんじ是々もうしや。御身。(十二ウ)かたちをあらはし詞をかはすとといひながら。悪鬼にうごじんと聞時は。さいごのでん道によつてもしややかんのみいれならん。誠二の君のゆうれいならばいで其しるしをみせ給へ御うたがひは御ことほり。実其しるしはあひそめし。たびねの床のに枕。後の形見ときいご迄持しは是ぞそみ給へいやとよそれは世の中にたぐひおほき物なれば。しるしとはしんじがたし御身とよ舟人しれず。契り給ひしことのはあらばそれをしるしに申さ給へ実々は御ことほり。思ひぞ出る我も又。かん王(十三オ)二

せいひの契りをまなひ天にあらばねがはくは。ひよくの鳥とならん。  
 地にあらばねがわくはれんりのえだとならんとちかひしきよめごと  
 太夫ハル 我はわすれずはへどしうちやくのながみやみぢやくろかみも  
 ちかひのふみもやきすてられしうらみは人をも世をも。思ひ思はし  
 只身一つの。むくいのみやらはらからの恋をあらそひ情をいどむ。  
 あねのしんゐのわき帰る岩もる水の思ひにむせび。又はこがるゝれ  
 んぼのみやうくわ。しやばのしうしん是御らんせとなをむすぶふる  
 けふりは恋(十三ウ)ぢのせきと成て。見へみ見へずみ。きへみ  
 きへずみ身をくるしむるおつとはこがれてなきさけぶ夫婦の袂のう  
 ぎ涙見きく袂も雨と成。ゆふべの露に村時雨ぬれてかはかん隙ぞな  
 太夫ハル 物かな。出家ならねばけうけすべき御法もしらず。出々やまと歌  
 中 下 天地をうごかし仏神もかんおう有。今我々がぎんするは。ごせ  
 んしうのいせが歌。此心をえて生死るてんの雲をはらひ。ぼんなふ  
 ぼだいの月を見よ程もなく。たれもを(十四オ)くれぬ世なれ共。  
 とまればゆくをさき立とみるとおしかへし。ぎんじかくればはゆ  
 ハル うれいは一首の歌にとくしんの。けふりは行たよりをえてしるし  
 中 枕を夫にあたふ。いとま申てさらばとて歌人は。みやこに。かへ  
 太夫ハル られければさるにても。君には此世あひみんこともよもぎがしま  
 中 づ鳥。又立帰れば。つまよぶきつねともよぶうづらうさぎのねぐら  
 ハル 野わけして。一もとときやう。おみなへし。なまめきのころおもか  
 げと見返り。立帰る五よく六ちんまちの中にはなれぬ(十

四ウ)れんぼのまよひ尤。々さもこそあらめと聞人。袂を。うるを  
 せり

鳥帽子折 二段目

フシケン ふる雪の。おときく程にしつかなる。竹よりおくのいつ庵ねこのか  
 よひぢ跡付し。たゞ一筋の道ほそく。油火ほのかにかき立て。女の  
 わざかしどけなき。引さきがみをむすびつぎ。なかばあげたるいよ  
 中 下 だれ。風ぞ雪を。もてきたる。ときはごぜんはともし火のかげを  
 たよりに尋より。大和へくだるおんな成がおきなきをを召くして  
 雪に道を(十五オ)うしなふたり。一夜の情と有ければ。十八九成  
 女房のしそくかゝげてゑんに出。おや子の人をつく。と打まも  
 中 下 り。いたはしの有さまやおやど申たうは候へ共。此頃平家のきたと  
 して義朝のゆかりをつよくせんぎ候が。人々の有様とがめんはひつ  
 ぢやう也。みづからはしろたへとて藤九郎もり長が妹源氏ふだいの  
 者なれ共。ふしぎのゑんにて平家の侍。弥平兵衛宗清のしのびつま  
 となり候。今にもつまの宗清殿来り給は。うきめこそみたまはん  
 情なしとな思召そよ。はら(十五ウ)わがつらきはいとしきゆへい  
 づく多成共落給へといとねんごろの詞の色しそく。ふきけし入にけ  
 中 下 り。ときはも今は頼みきれ。力も落てさきへもゆかれず。あとへと  
 てはもどられず。此此うへはうんにまかせてともかくも。こよひは  
 爰にあかさんと少風よぐのきかげに。小袖のつまのうはがいをしき  
 ねのことかたしかせ。かさならべてびやうぶとし昔はすいぢや  
 中 下 うかうけいに。すきまの風もさむかりし。身はならはしと身をすて

ム兄弟にふる雪を打はらひ〜。哀とふらふさよちどり(十六才)
 ないて。其夜をふかざるゝまなく隙なく。心なく。雪はこぼすがご
 とくにてかんふうさつ〜とはげしくて。人のきこつしみわた
 りはだへをさす事するどきやいばのごとく也。いたはしや母うへは。
 つかれたる身をかんにやぶられ。おかん五たいをくるしむれば。
 ア、たへがたやとふしまろび前後ふかくに見へ給ふ。今若をと若お
 どのきナウいかにせんかなしやと。ひたひをおさへ手をさすり。い
 かにとおわかほうへのさむからんに。物きせません尤と兄弟おび
 とき身せはなる。小袖をぬいで母うへの。(十六ウ) 寸や枕に取
 かさねうちかさね。我はいとはでうづもるゝ雪のはだか身あはれな
 り。母はくるしき。枕をあげ。扱いたはしの子共やな。かばかり母
 をたいせつにいかん孝行なればとて。わごぜ立をこゝえさせ。おや
 もみやうがにつくるそとよ子はそく才におひ立てみするぞふかき孝
 行なれ。風ばしひくなべ〜きよときすればぬいで母にきせ。いや我
 々はさむからず。侍のならひにはいかなる雪にも軍して。よき敵と
 くまん時さむしつめたしなんどて。敵にうしろを見すへきか。さ
 むいといふ(十七才) なおと若さむいとおすほな兄上とかい〜し
 げにいふこゑに。牛若めさまはしい出てとるをみまねにきぬをぬ
 ぎ。おなじく母にきせ参らせ。手足もふるひこゆれど其色みせず
 はぎしみし。こぶしをにぎりこたゆるてい母はきもたへめもくら
 み。ア、情なや浅ましや。百万よきの大將軍ともあふがるへき若共
 に一重のきぬをきせかぬるはいか成神のとがめぞや。いとおしの人
 達や御身達が心ざし。あやにしきよりあつければ母はきね共あたゝ

か也。ふびんの者よちよれと三人一所にかきよせて(十七ウ)
 いだき。ふしてそなき給ふ。ことほりとこそきこへけれ

多田院三段目 頼光さいこ

それ人がいは八くのうみ。げにくらしみのなみと風立のくるしきや
 まひのゆか。中にすくれてうき世かないたはしや頼光は。しだひ
 におとろへよにたのみなくみへ給へば頼信公をはじめとしてら
 うちうきん衆の諸將。日や御てんにあいつめて御きげんいかゞと
 かゞひける。しかる所へみ熊野しんぐうの別当あはたしく参上
 し。扱も若王寺のやし(十八才)ろはそんに付。しゆりの為うしろ
 のかたをやふり候へば。かくの物をこめ置候とさしあぐる。人々立
 より御前にて其まゝひらきみ給へば。あつき板に人を急かきむない
 たとくびに矢のねをつよく打こみ。ちんじゆふの將軍源の頼光とか
 き付し。うらには南無日本大りやうごんげんはやくきすいを見せし
 め候へ。願主源頼ちかとかきしるし。てうぶくのぐわんじよをそ
 へて置たりけりしこうの人々めとめを見合是はいかにとさはぎけ
 る。時に頼光御涙をはら〜とながさせたま(十八ウ) 誠にしん
 たいはつぶをふもに請。あへてそなひやぶらざるをかうのはじめ
 とすと也。かう〜をこそつくさす共。せめてはかゝる悪心有へ
 きことくも思はれず。扱も〜天めいしらすのよりちかめや。子と
 しておやをてうぶくする事。ためしあらざる悪人なり。それ神はひ
 れいを請候はず。何程きやつめがいの共。我ちやうごうきたらず
 ば。一めいつゝがは有まじつれどかゝるどうびやうぜひもなし。さ

れば過つるかつせんに。落行ぬかとすいりやうはしけれ共。おんあいはなれぬおやと子の中のかなしさは。今(十九才)こそかくは有ととも。世のうき事の身にしまばずこし心のなをりやせん。もしさもあらば折を多て。国の一か国や二か国のぬしにもなして多させも中。せめ又さもなくば出家をさせ。頼光がうきよの形見にのこさん中と。扱こそゆうめんしてはあれ。彼もろこしのしゝわうは。ちくるいなれ共道をしり子をかなしみて地にふせば子はさら道をわきまへずと矢をはなつておやをゐる。是よりちかめにあひおなじ。頼光むなしく成ならばいかなる仏事くやうも何ならず只よりちかめを尋(十九才)出しからめ取。かうべをはねて某がつかのまへにたむくべし。草の。かげにてじつけんし。うき世のむねをはるべきはと。いかれる御めに御涙をうかへさせ。給ひつゝ。また御枕にうつり給ひ。御れんさがれば人々は。げに御だうり。ことはりやとみなく。お次多しりぞきぬ。

男色加茂侍 せんせいきしやうぞめ

これ／＼ひだりの袖のなり爰の所がよみはじめ。月をあらため日をゑらみ心のにぎりきよらかに。水をむすんで身をきよめ。かはるまいとのきしやうもん。七つにわけて七所(二十才)なゝのやしるにをさむること。一わしとぬし様の中はかはらじいものとせの。二世をかけたる三つせ川。ふかき情をかけまくも忝なしや神かけて。いかなるうきな立浪の水しにをもてせつなくと。うりかゑられて見ぬ国のあらぬつとめをいたす共すこしもかはり申まじ。たとへねんき

のみてぬうち。もしもうとくのきやくかたよりかねをもつてみだけをさそひ。身請の品を申かけひくにひかれぬしゆびなり共。詞でいひけしふみでかきけし取あへずぢきににおしらせ申べし。扱又ねる夜の其外は日ごとよごとの身じまひ心にむすび置ぬ(二十才)る下ひもをかりにもとかでうき枕つらゐることのみかぞへつゝもらさずかりどこに。さよめのこさずとくおきて。其まゝ日帳に書もうし。うしやうかりしうきつとめ世のならばしとて口をしや。しゆしんばんしんになめさせ人の心をどろかすならひ。しかる所をいひくるめ口べにうしなひ申まじ。ことさら好色かね手形ぬすみ手形の其外に。いかなる手形成とても仰はそむかじ此外に。きしやうはもちろん定まりのふみより外をかくまじき。別てはまたお心にいらるぎきやくはさしづにまかせ。ことはり立てのき(廿一才)のつまかさねて。ものをいわまゆく見ずしらすのきやく成共。おうさ申人ならばあはでやみぬる品々を。日ぶみにもらし申まじ右。七かでの外よろつのこと。もうとうつゝますあかすべし。もしもきしやうのおもてをそむき。身のうへそまつにもつにおゐては。日本六十よしうのじんぎ別て氏のしんばつを。立所に請奉りげんたうにてはうきふしの。ながれのうみに身をはめてうかみも。やらぬみらいはなをながくあくしゆのくをうけん。よつてせいもんくだんのごとくしたぎにそむる七まいの。きしやうはかくのとをりぞと見ゆる所はよみもしつ。(廿一才)見へぬ所はよませもしつたつるやすかたなりけらし

ゑがらの平太 あさひながつま狂女のだん

三重  
 へ袖ぬれて。からすがなげば。もいのおしやる。月夜は。ヤアい  
 つも。なくからず。かはいくと。ねた中を。いかちぎりのあさ  
 ひなに。あかぬわかれのつま心。おつとにさられおやはなし。兄の  
 平太は行がたしらす。立よるかげもなつごころも心ほそぬの。あさひ  
 なが。いとまのしるしにえさせたる。あほしひたれ袋に入。中下  
 みの刀身をはなたすもつや田子のうら。あづまのはての(廿二才)  
 国々迄。まよひくつて清見寺。すごやはかなやはかはらに思わずた  
 どり出にけり。かすくのせきたうはたれか涙のたねならん。さも  
 あれむじやうせかいぞとほうかいむえんのたむけして。見ればあた  
 らしき高そとは。そくみやういつみの小次郎ちかむらとしるせり。  
 はつと手を討是こそは。親の敵入道が弟よな。ちを討せしうらみ  
 のうへおつとにわかれ兄にはなれ。上なきうきめを見ることもかれ  
 兄弟がゆへぞかし。うらみありやうらめしや。そとは成共一太刀討  
 て。しばししんるをやすめんとふくろをひらき取出し。立(廿二ウ)  
 糸ほしをかざおりかりきぬの袖を打かづいてつまのためにはしう  
 との敵我そあさひなあんくわはめぐりあひたりかたきは是ぞとなの  
 りかけて。はたと討ては。又此太刀は我うつ太刀と。二討三討うた  
 れてかつばとまるぶそとはを取てよせし討かけて。今は本望と  
 げたりと。につことわらひし有様はゆしくも又あはれなり。かゝ  
 る所に二人のちご人々をゆういんし。見ればけうがる女のすがたけ  
 にく。是はきやうじんよな。いかに狂女、おこことがこしかけたるは  
 忝くもぶつたいしきしやうのそとは。そこ立のけと有ければ。おろ

かの仰(廿三才)候や。花さきてこそ色かあれ。もど心なきみやま  
 木のはてはたまくとくだかる。おのゝ小町がぬいかに。こくら  
 くのうちなら。ばこそあしからめ。そとは何かは。くるしかるべき  
 むつかしの人のけうけやな。それはさとのたえなる詞。まよひの  
 女人は思ひもよらず。はやそこをされよとこそ。なふまよひの  
 女人あらずして。三世の諸仏の出世はいかに。とつこさんこれいし  
 やくちやう。女のすがたをくそくせり。一代けうしゆの。しやうそ  
 んだにも。やしゆたら女とちぎりをこめらごらといひし。御子あ  
 り。いわんやぼんふの身をもちて。恋があらずば(廿三ウ)うき世  
 もあらじ。たいばが悪も。くわんをんのしひ。ほんどくがくちも。  
 もんじゆのちあふしせんふしあくほんなふほたい花。もみち。月。  
 雪のふることもあらよしなや。まよふもさとるも我ひとりされば心  
 のしと成て。心をしとはなさよれとしめし給へば女房は。げにあや  
 まつたりまよふたり今は何をかつむべき。あがらの平太がいもう  
 とあさひながむかしのつま。ちのあたをむくいんためはしたなふ  
 るまひ。ゆるさせ給へと手を合かうべを。たれて礼すれば。何なふ  
 平太のいもうとやわらはこそいつきひめ。みづからはかのこの  
 前。同兄の清春よ(廿四才)それか。是かとすがり付。夢かたとど  
 ることのはのつゆのえにしそふしぎな。舞人御覧じよきかな  
 くかたなくかふるふしぎにあふことも。くわげんをちやうもんし  
 じやねんをはらひしきどぞや。しかるに天だいの五ちやうしやく  
 ちやう十二音律とふ時は。諸仏かんおううたがいなく成仏の糸

ん是ハルにしかず。廿五の菩薩の其役々をかたどれり。出でく語て聞  
すべししんハおこたることなかれ

## 佐々木大かゞみ まつよひしぐれ道行

相山ハル思ひ川ほさぬたもとに。ゆくみづのうきな。ながさんはつかしや人  
は。はた(廿四ウ)ちの花さか。り恋にくちなば。おしからぬちり  
の。あくたの身をすればうはのそ立。うすけふり。ありのすき  
みににくかりし。人のむくいかわがすがた。やつしやつれて。女共  
見へつ。男成けりなりふりは心かるしやきもかるや。よしやよし  
のわたし舟これもこがるゝたくひかや。しほならね共やくものに何  
をか思ひそめ付の。かすみむせふいんべのはま。爰ぞしつさうむ  
ろの津や。すいえんしんによの。なみはこきやうへ帰らば帰れ。我  
は帰らじけふ有て。あすをしらふの高砂や。あれはおのへのとを山  
松。是はなつかし恋草のひめちは雲のふり袖(廿五オ)に。なみの  
ちゝみのあか。しかた。はぎやききやうはみだれても。あをばのふ  
えにおしかななくすまの夕暮きて見れば浦のけしきはほのくく  
とサアさびしへいくくもみちちる。ア、くちりかゝる。さつ  
とちりくるむらもみぢ思はでたてをすげの笠。こそんのおきな。出  
て見よらんに花咲菊かほる。兵ごのとま露ふけて秋のはじめと西  
の宮。いく田こや野に誰あふ夜。もいのとつづるくだかけを。きつ  
ねはめなで。うらみくずのはつたのはハッアほだされたに。それでら  
からまよひ行に。やこもちかく。なるやらん。山のすかたや心なき。  
草木も心見ゆるに。廿五ウ。そいなかそだちのおもはゆく。かたぶ

けゆかんかぶと山みねにむらくむらさきの。雲やきせなが野はき  
んらんに。み山はさやにひぢりめん。風をいたみにかしひろふ。子  
共やさしく。あいらしく。このみ木の葉がはらくく。はつと嵐  
にちりくれば。ふゆまつ色に時ならぬ雪やこんこ。あられやこん  
こ。袖やこつまに。おちてたものと玉あられ。すこし笑のたねなれ  
や。なを行々てみなせ川ア、あねとてもつまつたず。いもふととて  
もいはけなきあだなつまじ男山とま(廿六オ)らでいそげしば  
も。昔に帰る夢はなく心をくたくたびまくら。かさねつりてらく  
やうやと有かりほに。かりのやどしばしとてこそ。しのばるれげに  
やくがいの世の中に。かかる思ひも有物か扱も。命は有物かと皆  
かたる袖聞たもとぬれて。ほすまはなかりけり

## 大磯虎稚物語 三段目

三章へ出にける。大ぬさの。ひく手あまたのうきふしや情うる里秋たけ  
て。頃しも九月十三夜。月の名残のもん日ぞと。思わぬ人にも大磯  
の長者が門の夕まがき。其数々(廿六ウ)のゆうくんの朝な。夕な  
にいろそめかほる。心の。もみぢしげれど。思ひくしのぶ  
山たがあみ笠のたそかれに。かぶろは恋のつぼみかや。ちらとさ  
やく詞の花。心とまるけしき也かもんの介勝重は多きろのこまに  
むち打て大磯に忍けるが。大もんより見たせば恋あき人のわけ里  
や。ゆきくの女郎色つくす松にはうたのしらべては風も。てうしや  
かへぬらん。地ぞやあの中ににわがいもふとも有つらんあれか是かと  
涙ぐみ馬かたを近付。某は此里に一宿してなぐさまん。しかるべき

あげやあらばあん(廿七才)ないせよと有ければ馬かた悦。さいはひく、戒の長とてお心や<sup>ナ</sup>き宿有と。内にかけ入長に角とさゝや<sup>ル</sup>けば。ふうふ悦たびの大臣様かそれおむかいにと大こには。きやらの伝吉下男せんごをかこみ。ヤおせんそくお行水。おつれないはあたまからしつほりぶんのすい様ぞ。中にかいのかみくずとれ先こなたへともてなしける。ふう婦さかづき持て出お望は候はぬか。けふは何をふ物日にてはきゝの女郎様にお<sup>ハ</sup>まはひとりも候はず。かしはやの<sup>レ</sup>れない様だもんわがてう様。川さきの大内様ちごやのうてな様(廿七ウ)。此里の四天王けさより是に御入もろふて成共見ませふか。先かりましてと<sup>タ</sup>んとすればかもん<sup>ノ</sup>の介いやく。人の恋をうばふとやらもろふといふもきのどく。此所にてきゝおよびしとらごせんといふ女郎をよぶことは成まいかとあらばア、誠にとら様はおひまならん。ヤア去ながら此きみはふかき男の候て。浮なくなるはにかくれなく外のじやまとて内よりかたくせきければ。女郎もすね給ひけふのやうな大もん目も。内にかうしのはし<sup>ラ</sup>をかぞへうきふねにておはします。外に恋有女郎は一座もおかしからずと申せば、てい(廿八才)しゆしろうとかな其恋しりが忝し。ちと身共<sup>ツ</sup>がしこなし見よはやくよべと有ければ、げにおもしろしそれとら様いけどれと。つかいがはしればかぶろが来りどつこいそりやまがぬける。是女郎様かり衣おこしをちよつとかけおびと。かる口もんさく花もさく心うかるゝ<sup>ハ</sup>夕ぐれは哀もまして。とら御せん。けいづ有身も親はらかなのためにしづみしあす。か川よな<sup>ハ</sup>かはる。夢はいつはり。誠のうつゝ身にこたへ。つとめの外の恋

衣はつと立なにおのづからほかの枕はそでに成。一夜はよべど<sup>ニ</sup>夜とよぶきやくも。ながれ(廿八ウ)の。身はつらや心にそまぬ涙をも<sup>キ</sup>さあらぬ。てい<sup>ニ</sup>を<sup>シ</sup>つゝみや<sup>ヲ</sup>クリのさしきの。か<sup>ハ</sup>にぞなを<sup>ラ</sup>るゝ。あるじふう花めづらしき御出まづあれへ御とをり。月を御らんといひければずつとを<sup>ツ</sup>つて立ながら。本に丸い月のほし様はひとりもないと。詞あどなくいひすてゝ男見ぬめのすんとせし。かもんつくくゝ見るからにおさなくてわかれつる。ふうぞくはのこらねど誠父母のおもざしにさもにたり。うたがひもなくわがいとふびんのものゝ有様や。口惜の身のはてやと思へばくるしくむねいたく。思わ<sup>ズ</sup>涙をながしける。ていしゆ(廿九才)一ざのきを<sup>取</sup>て。おさしきさびしう候へばおさかづきはわれらより。こよひ<sup>ノ</sup>月に酒のむことやほとてないとひ給ひそと。ずんどさせばとらもすこしうけながしかもんにこそはさしにけれ。かもん盃取あげちやうど請はうけたれ共。是兄弟のさかづきとしらざるかふびんさよと。思へばきもき多めもくれてふか<sup>ク</sup>の。なみだをながしける。人々<sup>ハ</sup>是はとあやしめば涙をおさへ。ヲ、ふしん尤世の中はぜひもなし。承ればとら殿はふかき恋の有と<sup>キ</sup>くこよひの御出お心にそまじきに。つとめはまかせぬ身のならひうきふし成といとほしく。し(廿九ウ)きりに涙がこぼるゝと。よそになしてぞ申ける。詞にと<sup>ラ</sup>もほれくゝと。誠に世<sup>ノ</sup>人はよしあしのわるがうに帰つてうき名<sup>ノ</sup>のたねと成。御かた様のやうに情らしいは候わず。せつなき恋はもちたれ共。今のお詞お心にとんとほだされた。こよひは我身をま

かせません。じつどうもなりませぬすいた男とよりそへば。あるし  
 ふうふは手をたゞき虎様を手に入るは。今の世のすいめいか様御  
 んか大臣様の。おかほにようにましたとさはぐにぞ。弥々かなし  
 やるかたなく兄弟共しらず浅ましや。かわいのものゝ身のはてやと  
 スエテ(三十才)び涙はせきあへず。すきまのあらは名のらんと心を  
 つくれど。いもふと女郎やりてかぶるがあないにかつしげもおくのへ  
 り。をくにはしゆえん手をたゞき人をよぶやらわめくやら。かしが  
 ましさにまぎらはしくあだに夜をこそふかしけれ。かくて夜もふけ  
 候へばちとお床とよひ立るかぶるがあないにかつしげもおくのへ  
 一間にうつりしがうき世を思ひ。めぐらせばむねさすゝみ口惜く  
 只なくより外の事ぞなき。時を[う]つ[さ]ず[う]づとらも一間に入れ  
 ばかぶるはあたりをさしまはしともし火くらくそむけ。さしてもな  
 い(三十才)ことさゝやきまはり。ひんしやんとして帰りける。か  
 もんはいよゝゝ心くれさ[う]つ[さ]むいであたりしを。虎扱はも  
 たせぶりとすこしにくうや思ひけん。ゑしやくもなく床に入枕一ツ  
 てよいものを。たれにねよとてめんどうなと一つの枕取てなげよぎ  
 引。かつきふしにけり。かもんこゑをひそめ。なふ某はゆふけふな  
 らず御身にとひたきしさい有。其方誠のおや里は三島の宿。小しほ  
 ぐんじといふ人の娘にてはなきかといふ。とらはつと思ひなぶられ  
 てはふかく也と。されば親立はどう有かもしかとちうで(三十一  
 才)はおぼへぬと有。ヲ、かくすも尤。我は兄のかもんの介かつし  
 げよと。いゝもあへぬにおきあがり詞はなくて兄のかほ。しげく

とうちながめはつとすがりてなきいだすことばり。せめてあはれな  
 りやゝ有て誠におもへばおきな時見し御かほにおほへ有今かゝる  
 身のうきつらさ。ちゝはゝの御ためと思ひながせばくやみなし恋し  
 きはふるさとぞや。ちゝうへ様母うへ様何と御入候ぞ。めぐらしの  
 兄様やなど今迄はおとつれもあそばさぬぞ。とくにものりの給は  
 でよしなきふるまひはづかしやと。あるひ(三十一才)はうらみある  
 ひはくどきひぎにもたれ身をよせて。兄弟手に手を取かは[う]な  
 げき。したふぞだうりなる。かもん涙をとゞめはゝうへの御ことつ  
 て。ちゝぐんじのさいごのしなかりもあへぬに何ちゝはうたれ給  
 ふとや。それは誠か情なや。ものうきつとめもおやたちにあはんと  
 思ふたのしみに。うきとし月をしぎしにながらへてかひもなし。  
 女ながらもおやのかたきせめて一たちうたせてたべ。さもなくば一  
 思ひに。ころしてたべ兄うへ様とこゑをあげてぞ。なきにける。か  
 もんいさめてヲ、でかしたく。われもさこそ思ひつれ(三十二才)。  
 さて此くるはをなにしてかは出べきぞそれはわらには御まかせみ  
 なくゝふしてちぶんよしと。下女のひとへをうゑにかけ手のごひか  
 づきさかだるもち。かもんとはあとさきにはなうたうたひ大もんぐ  
 ち。つゝとをれば夜ばんども。いせやのすぎかさかやはもはやね  
 つろふにと。見ちがへとをせばとら御ぜんとらのおをふむこゝちし  
 て。あしもなかくゝ地につかずいきをはかりにおちたまふ

盛久(もつひさ) はうしやうがく道行(みちゆき) (三十二才)  
 ぬれぬきこそ。いとふべきよその露さへほかならず。ゑじのたく



火のもえさしに。ゆかりのけふり立さらで今はたむせぶ。我身ぞや  
 是もしゆ行と菊の前。あんぢのくわんをんおひ参らせ。ほう正がく  
 はさきに立こしにみどりのなぎのはや。笠にさいいたもなきのはの。  
 くまのだうしやに立立し。道もおぼろの玉しみづ。今をかぎりとむ  
 すびすて。都のなごり。けふの身と。げに心なきみやま木も我を。  
 見をくる花のふきよのしがの山こゑ。うちすぎで。あのおまさ  
 がおちかたを。わが行そらとみわたせ(三十三オ)ば。心ぼそき  
 ぞ。まさりける。ぎわうぎによが恋衣。すみの袂にこけむして。  
 さが野々しもにやつれしも。我にはよもやをよばしと。過にしかた  
 も身のうへにひゐてくらべん。ひはの海浪の。てうしもまばらにて  
 あはぬうきなの。高宮は。おのが心よおのゝしゆく。印の石に物と  
 はん。一夜二夜くるしきを九十九よとのかね言葉。いかにつれなき  
 小町づか。ゆきゝの人の手むけ草。袖とくやすりはりの。たうげ  
 はるゝながむればめいどの鳥の初ほとどぎすしての。たよりの。  
 山風ふかば。文をこしちの海みへて。すへはかすみにはてしなく。  
 いと心をおきつ白波(三十三ウ)なみはつるがの磯に打とよ  
 の。いやうつなき。ひばらかやわらはけゆけは。ふとゝいふ虫  
 恋しらずはり有草にいとしろき。あしはさながら。べにがの子。い  
 ふにいわれぬかみなれど。風のむすぼれくしとりて野沢の。水にか  
 げ見ればみぎはにさけるおもだかの。おもはづかしや。おもはゆや  
 むかしのすがた色うせて。やつれはてたよ我身こそいやわが身こそ  
 我こそと。水にくましくかきにこす。つえなげすてア、浮世。い

らぬものよとめにうかふ。涙やさしくあはれなり。たびのは衣きそ  
 川の。みをぎも我もくちはてゝ。も(三十四オ)すほろくほろ  
 うつこゑもあさの。ひなきとすおさなひばりの雲にきへんと  
 と。おちては。又ちりくどとゑの。せはしく。あがりつをりつ。  
 はねも心もかるい沢。のぼりくだりて坂本の。こそをつらに水く  
 ぐるいわまくに。しつかとく。かほりくくくる。梅の花は  
 おるまいか。ひらるたもござる。つぼんだもござる。あらしふかね  
 ど。ひとゑだふたえだたをらばの。おりとりく。ゑだ折の花じ  
 や。程にいへずとも。たれかあるじと。松えだやとまりはなのみい  
 たづらに。いつのそま木に引せめしわがやどならでのきは吹板花の  
 宿にぞ着給ふ(三十四ウ)